

こんにちは！ 室長の工藤です。

「横内城番十人衆」（以下、「十人衆」と略記）ってご存知でしょうか。昭和30年（1955）刊の『横内村誌』によれば、大浦（津軽）為信によって横内城主堤氏断絶となった後、ここに十人衆を置いて外ヶ浜を統治させたとあります。堤氏についてはまだ分からないことがたくさんあるのですが、戦国時代末期の大浦氏の外浜支配と絡む存在であったとひとまずは考えられます。



横内城跡

さて、弘前藩が津軽為信に仕えた家臣の由緒書を集め、文化3年（1806）に編さんした「由緒書抜」という史料があります。これは最近頃に注目されていて、後代に編さんされた史料であるにも関わらず、その内容の信頼性は高いと評価されています。そこで、この史料から十人衆に関わる記述を探してみると、9例検出できました。

そこでは、十人衆と目される人物が6名ないし7名判明しましたが、さきの『横内村誌』に名前が見える者のうち3名は確認できませんでした。このうち1名は組頭と称されています。さらに、小山内主膳という人物が横内城主となり、十人衆の「支配」を任せられていたとあります。したがって、十人衆は横内城主のもとに編成され、そのリーダー的な存在が組頭と呼ばれていたと考えられます。そして、彼らは為信の津軽独立戦の最終段階で対南部勢の最前線に配備された軍勢とみられ、横内城を占領した天正17年（1589）頃に成立したものと考えられます。

しかし、津軽独立後、10年ほど十人衆に関する記述は途絶えます。そして再び登場するのは、慶長年間（1596～1615）の初期になります。この頃の十人衆は、津軽領の境界領域の「押え」がその役割となっていて、配備された当初の担いと大きな変化はありません。ただ、この頃になるともうひとつの役割が求められるようになります。それは、外浜地域の支配の末端を担うことになったことです。しかも、ちょうどこの頃の外浜地域では、小規模な開発が始まりつつあることが分かってきています。

それから20年ほどの時が流れます。外浜の地には後に城下弘前に次ぐ都市として成長する「青森」が誕生します。このようにみえてくると、「青森」の誕生は、天正18年の津軽独立後の、大浦氏が横内城を拠点とし、十人衆に地域支配の末端を担わせ推進した「外浜開発」の一種の到達点であったということもできるでしょう。